



からしだね

2018年8月・9月号
(541号)

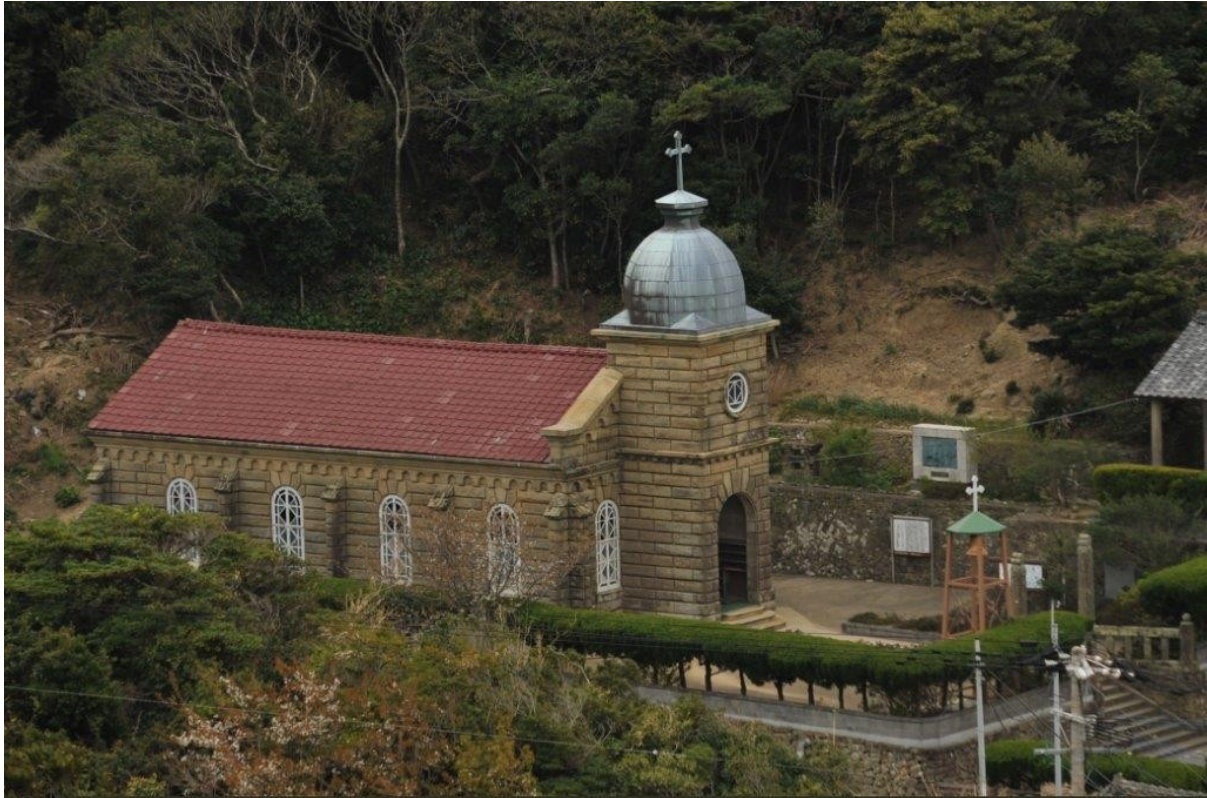
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父による巻頭言

「神さまの呼びかけ」

松本一宏神父様の2周年追悼ミサ

地震により、聖堂に被害が出る

「御子(みこ)」の「おんこ」への読み替え

日曜学校合同お泊り会とノノイ神父様のお祝い

支援先紹介『インドへ友愛の手を！』

大人の日曜学校だより(6/24)

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」
の世界文化遺産登録を受けて

みんなの談話室

わたしの好きな映画、

俳句2句

8月～9月の教会カレンダーへの追加

巻頭言

神さまの呼びかけ

ノイ・プラザ C.P.

光陰矢のごとし！愛するわたしたちの神父に別れを告げたのが昨日のようです。けれど二週間ほどまえ、池田教会は松本一宏神父の二度目の命日にあたり二回もミサをささげました。さいしょのミサは亡くなったまさに当日、そして二回目はふつかあとでした。多くのかたが祈りを捧げるためにおいでになり、わたしには喜ばしい驚きとなりました。

ところで松本さんが亡くなってしばらくしたころ、売布にある黙想の家の受付で、額に納められたまだ幼稚園生らしい彼の写真に気づいたことがあります。椅子に腰かけたマザーテレサの左側に松本さんが立っている。その写真をはじめて見たとき、こころ打たれました。神さまの永遠の抱擁のなかに、いまふたりがいるなんて、そのときだれが思ったでしょう。

パウロ松本神父はマザーテレサとたまたま出会っただけでしたが、それは人があまり歩まない修道生活へと彼をいざなう、神さまがまかれた天職の種だったのでしょう。まこと神さまの御心を推し量ることはできません。ただ判っているのは、どんな暮らしをしようかと、わたしたち一人一人を神さまが

ご自分の役に立つよう呼びかけておられる、ということだけです。

それは(旧約聖書の)アモスもおなじでした。羊飼いでイチジク桑の栽培もしていました。その彼に神さまは預言者となるように求められた。一二人の弟子たちだっただけです。すでに生活の糧をもってはいたのですから。けれど、誰もがイエスの招きにおうじて、自分の仕事をわきにおいてイエスの司牧に加わったのです。

こんな風に考えてみると、みなさんも自分にこう問いかけてもいいと思います—神さまはわたしになにをし、なにになるよう呼びかけておられるのだろう、と。主のお役に立つよう求められている、という気になったことはありませんか。池田共同体をよりよくするため、どんなことが自分にはできるのだろう、と。いったん神さまの呼びかけが判ったら、そのときは気前よくお役に立とうではありませんか。その仕事はなんであれ、神さまの恩寵にあつては天職となりうるからです—ほかでもない、あなたのそのやり方で神さまは役に立つよう呼びかけておられるのです。

(翻訳は広報委員会、原文は次ページに)

8月のガラスケースのことば

主よ朝明けに私の声を聞いてください。

朝明けに私はあなたのために備えをし、見張りをします

詩編 5

GOD'S CALL

Nonoy Plaza C.P.

Time flies! It seemed only yesterday when we bade farewell to our beloved priest. But a couple of weeks ago, our parish offered not only one but two masses on the occasion of Fr. Paul Kazuhiro Matsumoto's second death anniversary. One was celebrated on very day of his anniversary itself and the other one, two days after. To my pleasant surprise, in both occasions, many showed up to offer prayers for him.

It was only sometime after his death, by the way, that I noticed (at the reception room at our Retreat House in Mefu), a small framed picture of him when he was still probably a kindergarten kid. He was standing on the left side of Mother Teresa who was seated on a chair. Upon seeing it for the first time, I was simply struck by it. Who would have thought that they are now in God's eternal embrace?

Fr. Paul's chanced encounter with

Mother Teresa could very well be the seed of God's vocation, inviting him the less travelled-road of religious life. Surely, we could not fathom the mind of God. But we do know that He calls each one of us to serve Him in whatever state of life we find ourselves in.

Such was the case, for example, of Amos. He was just a shepherd and a dresser of sycamores. But then God called him to be a prophet. The same can be said of the Twelve. They, too, already had their own means of livelihood. But, at Jesus' invitation, each was willing to set aside his job in order to share in Jesus' ministry.

In light of this, I think it is good to ask ourselves: What has God called me to do and to be? Did it ever occur to you that you, too, are being called to serve the Lord? What can you contribute to the betterment of our community? Once we discern his call, let us then try to be generous in serving Him. For no matter what that work might be, in God's grace, it can be a vocation ; it is His call for you to serve Him in a particular way.

松本一宏神父様の2周年追悼ミサ



十字架のパウロ、松本一宏神父様の追悼ミサが、命日の7月12日(木)の午前9時からと、7月14日(土)の午後5時からの2回、池田教会聖堂で行われました。司式はどちらも中村克徳神父様で、ノイ・プラザ神父様も共に祈られ、ノイ神父様がお説教をなさいました。

ノイ神父様はお説教で、松本神父様の写真を掲げられました。それは、幼少期に「宝塚黙想

の家」でマザー・テレサと出会われた時の貴重な写真でした。そのときが、将来、神父になろうと決意された瞬間だったかもしれません。キリストの弟子として一生を捧げ、キリストのために働かれた松本神父様を見習い、わたしたちもキリストのため、神様のために、自分の小さな力を精いっぱい使って働くことができますように。

大阪府北部地震(6/18)により、聖堂に被害が出る



6月18日(月)午前8時58分ごろ、高槻市あたりを震源とする大阪府北部地震が発生した。池田市は震度5弱と発表された。池田教会では聖堂の天井に近いガラス窓が数枚、割れたり、ひびが入ったりするという被害が出た。応急処置を施したものの、余震が続くため、24日の洗礼者聖ヨハネの誕生のミサは、ノイ神父様の司式によりカール記念館1階でとりおこなわれた。24日はお泊り会明けの日曜日だったが、各委員会や子供たちの協力のもと、迅速に祭壇が作られ、折り畳み椅

子が並べられた。椅子の巧みな配置により、席のない人は誰一人いなかった。いつもとはちがう場所でのミサは、一体感に満たされ、新たな感動を覚えるものとなった。初代教会のミサもまた、狭い部屋に、パンとぶどう酒の置かれたテーブル一つ、という簡素なものだったのではなかろうか。

以降の主日のミサも、信徒の安全を基本方針に据えられたノイ神父様の決定により、修復工事が済むまで、引き続きあと2回、カール記念館でおこなわれた。

「御子(みこ)」の「おんこ」への読み替え

典礼委員会

カトリック教会の典礼式文では「御子」を「おんこ」と読んできましたが、典礼における聖書朗読で使用している『聖書 新共同訳』では「御子」を

「みこ」と読んでいます。日本カトリック典礼委員会が日本聖書協会と協議した結果、典礼における聖書朗読に限って「みこ」を「おんこ」と読み替える許可を得ました。読み替えは5月21日から実施されており、池田教会の朗読用聖書のふりがなの「みこ」は「おんこ」に順次修正されています。

日曜学校合同お泊り会と ノイ神父様のお祝い

7月14日(土)に毎年一回の小学校・中高生の合同お泊り会がおこなわれた。幼稚園児から高校生まで、20人以上が参加し、賑やかな会となった。ノイ神父様の叙階30周年を皆でお祝いし、祈り、30と書かれた手作りの大きなデコレーションケーキを切り分けて皆でいただいた。食事はカレー。恒例となっている銭湯へも行った。



支援先紹介 社会活動委員会

『インドへ友愛の手を！』

いつも池田教会で行っている、いろいろな支援に対してご協力頂きありがとうございます。今後何回かに分けて、からしだね誌上で支援先を紹介していきたいと思えます。

今回は、インドの貧しい子どもたちの教育を支援するプロジェクトとして発足した『インドへ友愛の手を！』です。

この活動は、マリア御心会のシスター・ジーン・シュミッドが1979年の「国際児童年」にインドにおられた同じ修道会のシスター・パツツイ・カーンと出会ったことがきっかけとなり発足しま

した。

当初は、シスターが貧しい子供のいる家を一軒一軒訪ねて、学校へ行かせるよう説得することから始まり、現在もインドの厳しい環境にいる子ども達への教育支援活動を行っています。

その活動に賛同する意味で池田教会から、約30年にわたって送金しています。活動報告としてのニュースレターを、聖堂後の掲示板に掲示していますのでご覧下さい。

大人の日曜学校だより

6月24日 洗礼者聖ヨハネの誕生

「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」

ルカ 1:66

今日は、洗礼者聖ヨハネの誕生について書かれたルカの福音を読み、分かち合った。こどもが生まれたとき親は、こどもがどういうふうになるのだろうかと夢をいだく。しかし昨今若い人による凶悪犯罪が続いている。いったいどうして・・・と考えてしまう。ほんとうに安心感のある人間関係が築けていないのではないか。親でなくても一人でもほんとうの人間関係を築く人がいればと思う。出会いの大切さをあらためて感じる。そのようなほんものの出会いを体験したのが洗礼者聖ヨハネだろう。母エリザベトの胎内にいる時から身ごもっていたマリアの挨拶を聞いて「よろこび踊った」。そしてイエスの洗礼。イエスに洗礼を授けても決してかん違いすることなく「その方の履物をお脱がせする資格もない」ことを自覚している。そのようなほんものの出会いをしたヨハネでさえ牢の中で「来るべき方はあなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか」と聞きに行かせるところを読むとヨハネも迷いがあつたのだろうかと思ふと親しみを感じる。

フランシスコ教皇様が、この日ツイッターでつぎのように言われているのを教えてくださった方がいた。「Like St John the Baptist, Christians have to humble themselves so that the Lord can grow in their hearts.」洗礼者聖ヨハネのように、主がわたしたちのこのころの中で成長できるようにわたしたちキリスト者は、へりくだらなければならない。

キリストがわたしたちのこのころのなかで成長してくださいように！

研修委員会

ユネスコ世界遺産委員会は、先月末に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録を承認した。カトリック教会の歴史上で珍しい長期間に亘るキリシタンの発生・潜伏・復活の歴史的な事実に関心が集まった結果でしょう。その地方を管轄する長崎大司教区高見三明大司教は、同日、ステートメントを発表したのでその一部を長崎大司教区のHPから転載します。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録を受けて

(宗)カトリック長崎大司教区
大司教 高見 三明

まず、長崎地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界中のすべての人々にとって価値を有すると認めていただいたこと、日本初のキリスト教関連の世界遺産となることを大変ありがたく嬉しく思います。

さて、長崎地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界文化遺産として登録されたということは、世界中の人々から認められ得る価値を有するということです。一言でいえば、日本における470年に及ぶ、他に類を見ないキリスト教の歴史につらなり、それを物語る“証し”だということです。

(1) キリスト教の伝来と繁栄

キリスト教は、イエズス会宣教師ザビエル神父一行の渡来(1549年8月)以後、九州から東北に至るまで多くの日本人に受け入れられ発展しました。信者の数も、1600年初頭には約1200万人の全人口のうち50万人近くまで増えたと思われます。全国に教会が200ほど建造され、付属の初等学校に加えて、有馬と安土には中等学校のセナリヨ、府内には大神学校のコレジオ、さらには病院や看護養成所などが設立されました。(以下、一部略)

(2) 禁教と潜伏

天下を統一した徳川家康は、キリスト教の平等思想や貧者救済を危惧し、特に西欧列強の侵攻を排除するため、1614年1月「排吉利支丹文」をもってキリスト教を「邪法」と断じ、切支丹禁教令を全国に布きました。以後260年もの間、宗門改、五人組、絵踏、高札などによって厳しい禁教政策が実施されました。諸外国に対して長崎の港だけを開いた鎖国政策はキリシタン排除のためでもありました。

このような状況の中で、一方ではいのちをかけて神への忠実さを貫いた殉教者も数万に及びました。他方では、特に長崎地方の浦上、外海、平戸、五島、また天草地方や福岡の今村などの信者たちは、寺請制度(檀家制度)に従って表面的に最寄りの寺の檀家となりながらも、教えと教会暦に通じた帳方、洗礼を受ける水方、帳方の連絡

係の聞き役・ふれ役などの秘密組織を守り、信心会(組)を持ち、こころの中ではキリスト教の信仰を受け継ぎ、固く守り、伝えていきました。これが“潜伏”の意味です。キリストを信じること自体が違法だったので、“改心”すなわち棄教か、いのちを失うかの二者択一を迫られるという理不尽な扱いを受けましたし、周囲からは差別も受けました。しかし、信者たちは為政者に抗うことなく、声に出さずとも信教の自由という基本的人権を貫き、この世限りのものよりも神への信仰を優先させ、永遠に価値あるものを希望し続けました。彼らのこの生き方は崇高でさえあります。

(3) キリシタンの復活

幕末の1858(安政4)年に米、蘭、露、英、仏の五か国は江戸幕府に開国を迫って修好通商条約を結び、国内でも尊王攘夷論や討幕運動が起こって時代が大きく変わろうとしていました。そのような中、1865年3月17日、パリ外国宣教会のプティジャン神父が大浦に建設した天主堂を浦上のキリシタンたちが訪れ、神父に先祖代々守って来た信仰を表明したのです。これが「日本の信徒発見」と呼ばれ、キリシタンの復活を画する出来事でした。

7代待ち望んだカトリック司祭の到来に勇気づけられたキリシタンたちはそれまで隠していた信仰を公に表明するようになりました。その結果、1867年7月15日未明に長崎奉行による一斉検挙が行われました。これが浦上四番崩れです。翌1868年、幕府の禁教政策を踏襲した明治政府は浦上のキリシタン3,400余名の流罪処分を決定し、20藩の22か所に順次配流したのです。この事態を受けて上記の五か国が政府を強く非難し、条約改正のため米欧に派遣された岩倉具視遣外使節団は行く先々で痛烈な非難を浴びたため、1873年2月「切支丹禁制の高札」が撤去されるに至りました。そして16年後公布された「大日本帝国憲法」第28条において信教の自由が認められるのです。これはキリシタンたちが一貫して信仰を固く守った成果の一つです。

こうして1873年3月に浦上のキリシタンは帰郷を許され、4月から7月にかけて次々に配流地を後にしました。そして最初にしたのは、教会を建設することでした。同じように各地で教会が建造され、それを中心にして潜伏時代を通して受け継いだ信仰を生きて、さらに後世に伝える共同体(集落)が存続してきました。

世界遺産と認められた教会はそのほんの一部ですが、キリシタンの繁栄と潜伏と復活の歴史を静かに証ししています。(以下、略)

みんなの談話室

わたしの好きな映画(1)

直

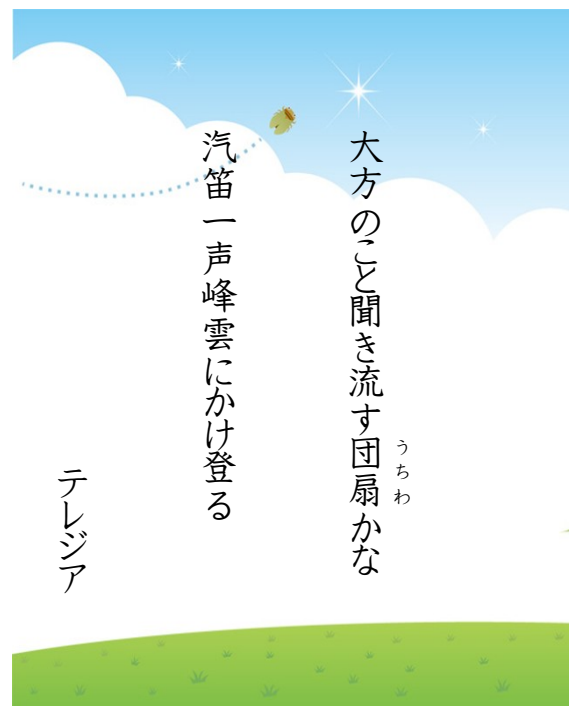
かすかに噴煙たなびく浅間山、天井もないむき出しの貨車に乗客いっぱい草軽電鉄、デコちゃんこと高峰秀子の踊り子、小学校の音楽教師に佐田啓二(中井貴一のお父さん)、校長はもちろん笠智衆、まだいるぞ、盲目の貧乏作曲家に佐野周二(世間を騒がせたニセ盲目の「天才」作曲家 佐村河内[さむらごうち]じゃないから念のため)に小林トシ子、きわめつけは木下恵介…ここまで読んできて「ハハーン」とくるのは映画好きのジジババ。『カルメン故郷に帰る』。日本初の天然色(懐かしい!)で1951年リリース。つまり奴ガレが生まれた翌年。

話は簡単。「ちょっぴりおつむの弱い女性が帰郷した信州浅間山のふもと 職業はストリッパー 純朴な村人とのてんやわんやを見つめる世相風俗批判の目」(カバージャケット)と紹介されてる。終戦直後の日本の雰囲気味わえる。まずは服装。若い女性でもモンペ姿がまだおおく、小学校の子供たちは靴もはかず、裸足(はだし)で運動会の準備のために運動場を駆けまわる。わたし自身もじっさい小学校ではおなじ経験をした。いまなら「足をケガする」とPTAから教育委員会にクレームものだろう。若い親たちが着飾るのは運動会当日、子供の晴れ姿を見ようと学校にやって来る日くらいか。笠智衆の校長は、運動会に山高帽燕尾服スタイルで出席する。いまみたいに男の服装が中性化して女性のと特別がつかなくなったのは、それほど昔じゃないわけだ。

「これからの日本は文化を大切にせにゃならん」とは山高帽スタイルで詩吟を愛する校長の口癖。昭和前半の暗い歴史への反省である。終戦

直後、世の文化人は猫も杓子も右にならんと同じようなことを言ったのだろう。ところが文化とはなにか、という肝心の問題になるとよく分かってない。消化不良。だから高峰・小林のストリッパーが、自分たちは東京で「文化」のために働いている、という手紙をまえにするとコロリと真に受けてふたりを歓迎するが、裸踊りの実体を知って激怒してしまう。もちろん娯楽に飢えた村人たちは別。肌もあらわなふたりの踊りに大興奮で拍手喝采、もってきたオニギリを咽につめて苦しむ爺さんまで出る始末。ほかにもふたりを利用して稼ぐことしか考えない社長が出てきたりして、笑いは絶えない。だが冷ややかに見つめているのではなく、冷やかしながらも「人間あんたもこんなものだろう」と微笑んでいる。

まずしくて物資も欠乏、終戦直後の混沌とした雰囲気がよく伝わってくるが、それを逆手にとって面白おかしく笑いに転換している。いまとなっては懐かしい別の国のような日本が見られること請けあい。ご覧あれ。



汽笛一声峰雲にかけ登る

大方のこと聞き流す団扇かな
うちわ

テレジア

9月のガラスケースのことば

いつまでも残るものは、

信仰と希望と愛です

一 コリント 13:13

8月～9月の教会カレンダーへの追加

- 8月12日(日) 典礼研修会
 8月25日(土) アルファ・コース合同同窓会
 映画「沈黙」の鑑賞と受洗祝賀会
 9月6、13、20、27日(木) 10:30
 聖書百週間
 9月14日、28日(金) 14:00～16:00 (予定)
 福音書を学ぶ会
 9月2、9、16、23、30日(日) 13:30～15:00 (予定)
 信仰入門

表紙の写真について

五島列島の最東端の小さな島、頭ヶ島にある頭ヶ島天主堂の写真である。2011年4月に池田教会の巡礼の旅で、Y.K.さんが撮影したもの。

ユネスコ世界遺産委員会は6月30日に、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を世界文化遺産に登録することを決めた。五島列島や天草、外海などに点在する潜伏キリシタンの集落10か所と、島原・天草一揆の舞台となった原城跡、そして現存する国内最古のキリスト教会、国宝に指定されている大浦天主堂を普遍的な価値があると認めた。

そんな潜伏キリシタン集落の一つが、頭ヶ島天主堂を含む「頭ヶ島の集落」である。1859年頃から、無人島だった頭ヶ島に潜伏キリシタンが住みついた。しかし1868年に「五島崩れ」と言われるキリシタン弾圧が起き、主だった信者が拷問を受けたため、島民全員は島から一時逃れた。新しい世の中になると、島民たちが戻ってきた。1910年、鉄川与助の設計施工により、石造りの天主堂の建設が始まった。島民たちは舟で石を運んでは一つ一つ積み上げていった。10年後の1919年ようやく完成した、この石造りの天主堂は、国の重要文化財に指定されている。

6月30日の産経新聞は、前田万葉大司教様が潜伏キリシタンの子孫である、と報じている。大司教様はインタビューを受けて「五島列島の久賀島にいた父方の曾祖父家族9人がつかまり、6坪の牢に200人も閉じ込める拷問を受けた。21歳だった曾祖父は8か月の入獄を生き延びたのですが、3人の妹が命を落としたのです」と答えておられる。いっぽう、野崎島にいた大司教様の母方の曾祖父は、拷問に耐えかねて転んだふりをして解放された。だが故郷へ帰ってから罪の意識にさい

なまれたという。同じように野崎島に帰った信徒たちは罪滅ぼしのために、生活を切り詰めて立派な教会を建てた。旧野崎教会を含む「野崎島の集落跡」も「頭ヶ島の集落」も、そうした人々の思いと信仰と歴史が詰まった世界文化遺産である。

Y.N.

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

8月～10月 お休み

■週末黙想会

8月～10月 お休み

■韓国語による聖書の勉強

8月29日(水) 10:00～15:00

9月26日(水) 10:00～15:00

指導：アンドリュー神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797(84)3111



編集後記

この編集後記を書いているのは七月七日。七夕である。おり姫と彦星が一年にいちどだけ出会うという。ロマンチックな天界のできごととは裏腹に、地上ではオウム真理教がらみで首謀者たち7人が処刑された翌日とあいなった。恐ろしい事件が次々におきた。あれこれ思うが、ひとつだけあげれば「指導者」の資質である。どうしよオウム集団はたんなるヨガ教室だったとか。町のどこにでもある「文化教室」だったらしい。それがいつから人を殺すことも正当化するような狂信的殺人集団に墮したのか…たしかなのは首謀者の支配欲が信者を狂わせたこと。信仰は諸刃の剣。真剣に帰依する心がなければ深まらないが、いっぽうで「宗教にはまらな」などと世間でいうように理性心を喪失させることもある。リーダーたるものの責任は重い。

直